

Udai 教育セミナーレポート

「より良く生きる」のアクティブ・ラーニング

授業担当者: 上原 伸夫(工学研究科・准教授) 大庭 亨(工学研究科・准教授)

日時・場所 平成27年7月7日(火) 7・8限(公開授業) 討論会 16:15~16:45

場所 陽東キャンパス 212 参加対象 本学教職員、学生

✦ Udai 教育セミナー開催の趣旨

宇都宮大学は、平成26年度文部科学省「大学教育再生加速プログラム」に採択されました。新たな地域社会の変革を担うべく主体的に挑戦(Challenge)、自らを変え(Change)、社会に貢献(Contribution)する人材を養成するために、従来の学力に加えて「行動的知性」の伸長を図ることを目指しています。

本学の多様な授業実践の成果と課題を共有することを目的に、Udai 教育セミナーを定期的で開催しています。第4回は、「より良く生きる」(アクティブ・ラーニング科目)の公開授業と連動させて開催する流れとなりました。

「より良く生きる」は、前半は上原先生が担当され(「人は何のために生きているのか」をテーマに働くことと生きることの相関を考える)、複数のゲストスピーカーの話題提供を経て、後半は大庭先生が担当されています(どのような行動が人間の力を伸ばすのか、事例を紹介しながら具体的に考える)。

今回のセミナーは、全15回のうち、大庭先生が担当される第11回「夢を実現する」を参観し、そのあとに上原先生、大庭先生、参加者で討論会を行いました。

※「より良く生きる」は、アクティブ・ラーニングを先導的に開発・推進する教員を財政的支援する「教育プログラム支援経費(アクティブ・ラーニング開発支援)」の平成27年度採択科目です。

✦ 導入としてのフィードバック

授業は、前回は提出されたリフレクション(出席カードに「感想・質問・気づいたこと」を記入する欄がある)に対するフィードバックから始まりました。

授業を通じて持った感想等の記述をパワーポイントで取り上げ、大庭先生がそれらにコメントを付けるという形でした。資料を読んで「どのように思ったのか」、「自分の生活をどのように振り返ったか」、あるいは「どのように考えが変わったか」など、さまざまな視点が紹介されました。一部、昨年度の受講者の感想も組み込まれていました。年度を超えて感想等を共有し、学生が多様な見方に触れることができるように配慮されていました。

公開授業後の討論会で、授業の最初にフィードバックを入れている理由として、主に以下を挙げていました。

- ① 教員の考えの押しつけではなく、「気づき」を重視することで、学生に当事者感覚を持たせる。
- ② 他の受講者の感想や考察に触れることで、多様な考え方が存在することを知る。
- ③ 教室の雰囲気をも温め、発言しやすい状況を少しずつ作る。

リフレクションの内容を読み上げ、それに対して「共感」の態度を示すことで、意見を発信することに対して学生に安心感を持たせ、その後続くディスカッション

ンにつなげていこうとする教員の姿勢がとても印象的でした。

✚ 精読からペア・ディスカッションへ

次に設けられたのが、配布された資料を「精読」する時間です。取り上げられたのは、小説家の村上春樹氏の回想、教育学者の齋藤孝氏の回想、そして起業家のアメリカ人女性の事例を紹介した文章でした。3名の回想(事例)を、「Episod-1」、「Episod-2」、「Episod-3」として区分し、それぞれ「どのような言葉が印象に残ったのか」、「気になった行動などはあるか」など、アンダーラインを引くように促していました。

指定したエピソードが読み終わった頃を見計らい、隣同士の人と感想を伝え合う「ペア・ディスカッション」が導入されました。教室は、2人掛けもしくは3人掛けの机だったため、一部の学生を移動させる必要がありましたが、教員の促しもあり、スムーズにペアが組まれていました。「よーい、スタート!」という掛け声と共にディスカッションが開始され、教員はどのような論点があるのかをさり気なく示唆しながら巡回していました。



ペア・ディスカッションを導入する場合、学生同士の心理的距離などから、話し合いが盛り上がりがないというリスクを伴います。しかし、教員が座席指定をしないことで、友人と隣り合わせで座る確率が高くなります。それが結果として、各々の行動を省察することも少なくない本授業で、ペア・ディスカッションを成立させた要因になったのではないかと思います。

✚ 発表

ペア・ディスカッションは、一定の盛り上がりを見せて

いたものの、話し合いの内容を全体に発言するとなると、ややハードルが高かったようです。ひとりの学生が発言した他は、自主的に手を挙げる学生はいませんでした。

学生が手を挙げるに至らない場合、目についた学生にマイクを向ける、順番に発言させる等の対応をすることが多いと思いますが、大庭先生の場合は、そのまま次の話題に移っていました。討論会の時間に、そのように対応した理由として、以下の点を挙げられました。

- ① 学生は、すぐに言語化できなくても、何か考えていることはある。
- ② 学生には話す準備ができるタイミングがあるので、あえて急かさない。
- ③ 考えがまとまってくると、自然と発言したいという気持ちが高まる。

実際、3つ目のアメリカ人女性のエピソードを取り上げる頃には、教員が発言を求めると手を挙げる学生があらわれ始めました。発言内容を、上原先生が黒板に書き出し、解釈の相関を矢印であらわしていきました。マイク係と板書係に分かれた連携プレーは、事前に打ち合わせたわけではなく、その場の雰囲気が出たアドリブということです。ここから、日頃のお二人の信頼関係の深さを垣間見ることができました。

✚ 幕間的な話題の挿入

最終的に学生の手が挙がるようになった理由のひとつとして、「Episod-2」から「Episod-3」に移る間に、ダーウィンのミミズ研究の話題を入れたことも大きかったのではないかと思います。

ミミズは巣穴をふさぐために相応しい落ち葉を見つけるために行動するという、後に「アフォーダンス (affordance)」と命名された生物の基本的な生存原理の紹介を通じて、いくつかは失敗するかもしれないが、さまざまに行動を試みることで、最終的に自分に適した状況を見つけ出すことができるというメッセージが伝えられました。

そして、酔っ払い対策のベンチの形、大庭先生が飼われている犬の行動を、「アフォーダンス」という観点から説明することを学生に促しました。このとき、数人

の学生が積極的に発言したことを踏まえると、あえて視点を変えた幕間的な話題を入れることで、漠然とした考えがまとまり始めたのではないかという印象を持ちました。

✦ 討論会における論点（抜粋）

ポイント1： 学生が話したくなるまで教員は「待つ」

参加者のなかには、学生から積極的に発言をしてもらえないことで苦慮する教員が複数いました。そのとき、沈黙に耐え切れずに発言者を指定してしまうため、今回の授業における「待つ姿勢」はとても勇気がいるという感想が出ました。

その点について、自分の考えが整理されてくると必ず話したくなるので、その瞬間を「待つ」ようにしているという回答を大庭先生から頂きました。学生が発言するためのエネルギーを作り出せるように方向づけ、充満したエネルギーを解放できるようにするのが自分の役割であるとおっしゃっていました。

セミナーには、「より良く生きる」を受講している2名の学生が参加してくれました。受講している立場から、最初は発言することに不安を感じるが、考えがまとまるにつれて、「発言したい」という気持ちが高まるという声を頂きました。

ポイント2： ファシリテーターとして振る舞うこと

また、大庭先生のファシリテーターとしての振舞いの、以下のような点について注目するコメントが出されました。

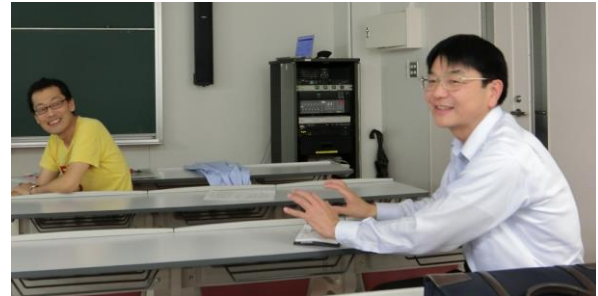
- ① 学生の発言後に「うなづく」ことで同意を示す。
- ② 学生の発言に対して「なるほど～」と共感する。
- ③ 漠然とした発言を分かり易く「言い換える」。
- ④ 笑顔を絶やさず、発言した学生には「お礼」を言う。

これらの振舞いが、発言に対する学生の不安感を解消し、後半の発言の活発化につながったのではないかという解釈がなされました。

ポイント3： 授業を行う上での問題意識

また、「より良く生きる」という大きなテーマについ

て、どのような基準で教材を選んでいるのかという質問も出ました。それに対して大庭先生から、「親世代」として「このようなことを考えて欲しい」という観点で教材を選んでいるという回答を頂きました。



また、上原先生からは、東日本大震災が起こったこと、退学を希望する学生の対応をしたことなどの複数の経験を通じて、「人間は何のために生きているのか」という根本的な問題を学生に考えて欲しいと思うようになり、本授業を立ち上げ取り組んでいるという回答を頂きました。

（報告:長谷川詩織）